

AGRI LAB REPORT



慶應SDMの「アグリゼミ」
AGRILAB/M2 座談会

山梨県“えがおつなげ”視察

AGRI Semi Report
農都共生研究会



慶應義塾大学大学システムデザイン・マネジメント研究科(以下SDM)には、専任教員による研究室型ラボのほかに、さまざまな分野の教員が横断的に活動をする横断型ラボがある。「農都共生ラボ(アグリゼミ)」は、横断型ラボの一つとして、2008年の開学と同時にスタートした。

農都共生は、「農村と都市と共生」の略語で、人材、経済、情報の循環による共生を目指している。農村と都市をトータルに考え、地域活性化を実現するための重要な概念である。農林中央金庫寄付講座の「農都共生ラボ」は、農業・農村を大きなシステムとして捉え、「農都共生」による地域活性化に関する研究・普及活動に取り組んでいる。前野教授、林特任教授などが参加している。

林特任教授が札幌を拠点にキャスターとして活動しているため、月に1~2度、日吉協生館のSDM研究科でラボを開講している。ラボの参加者は、多様な学部出身の新卒

大学院生、社会人院生をはじめ、SDM研究所研究員や学外のゲスト講師も多く、活発な議論・研究が行われている。

学内におけるゼミ開催の他、農業・農村視察などのフィールド研究に力を入れている。今年度は、神奈川県小田原市のみかん農家視察、埼玉県飯能市の地域づくり視察、山梨県北杜市の視察(詳しくは4~5ページ)などを実施した。また、農都共生ラボ主催により、一般市民を対象にした「農業・農村・地域活性化セミナー」を日吉で開催した。(詳しくは7ページ)

ラボに参加している学生の問題意識から、研究テーマは、「CSA(Community Supported Agriculture・地域が支える農業)」「農業ビジネス」「都市農業」など多岐にわたっている。

「農都共生」や「地域活性」に興味があるみなさん、慶應SDM農都共生ラボへの参加を願っている。

AGRILAB /M2

座談会

慶應SDMへ進学した理由や
アグリゼミで学んだ感想、修了後の進路について
修士2年生(M2)の3名に語ってもらいました。



寄玉 5年半ほど会社勤めをした後に起業したいと思い、慶應SDMの存在を知り入学しました。アグリゼミへは食や農業の分野で興味があったので選びました。2年間は大変勉強になりましたが、今、修士論文を書き終えて、気がついた点もあり、まだまだこれから勉強が必要だと感じています。

田久保 学部時代に地域活性化プロジェクトに関わったのですが、なかなか思うような成果があげられず、システムとして何か問題があるのではないかと思うようになり、その問題へのアプローチを考える場として最適な慶應SDMへ進学しました。

中村 私は以前、メーカーのエンジニアとして働いていたのですが、環境技術を普及させたいと思ったときに、その技術を組み込んだ商品が売れなければ意味がない。売れるためには社会全体を俯瞰的に見て科学技術を普及させる考え方を学べるのが慶應SDMでしたので、進学しました。

林 さまざまな横断的なゼミがある中で、皆さんがアグリゼミを選んだ理由は何ですか?

寄玉 慶應SDMを知ったきっかけが、農業やMBAと検索したときにアグリゼミが出てきたのがきっかけで、興味を持ちました。学校へ話を聞きに来た日に偶然にも林先生にお会いできて、心が決まったという感じです。

林 あれはまだ入学試験を受ける前でしたよね。食とか農業に当初から関心があったのですね。

寄玉 はい。アグリゼミOBの方が様々な活動をされていて、そういう方々と繋がれたというのが一番の財産になったと感じていますので、選んで本当によかったです。

田久保 私は慶應SDM修了生の村瀬さんの論文を入学前から読んでいました。農業と人が共生したり、地域社会の中で農業のあり方考えるゼミがSDMにしかなかったので入りました。

中村 私の場合、直接農業は研究テーマに関係ないのですが、北海道への視察などに興味を持ってアグリゼミを選びました。理工学部出身の私にとって広い視点で考えることが無かったのですが、農業はもちろん、経済の分野から農業に関わる人など、様々な人に農業に対する

■農都共生ラボ担当教員



前野 隆司

Takashi MAENO

慶應義塾大学大学院SDM研究科
委員長・教授

キヤノン(株)、カリフォルニア大学バークレー校Visiting Industrial Fellow、ハーバード大学客員教授、慶應義塾大学理工学部教授を経て、2008年よりSDM研究科教授。2011年4月よりSDM研究科委員長。

■研究テーマ／システムデザイン理論・方法論、人間社会システムデザイン、技術システムデザインなど
■著書／『思考脳力のつくり方』『錯覚する脳』『幸せのメカニズム』『システム×デザイン思考で世界を変える—慶應SDM「イノベーションのつくり方」』ほか

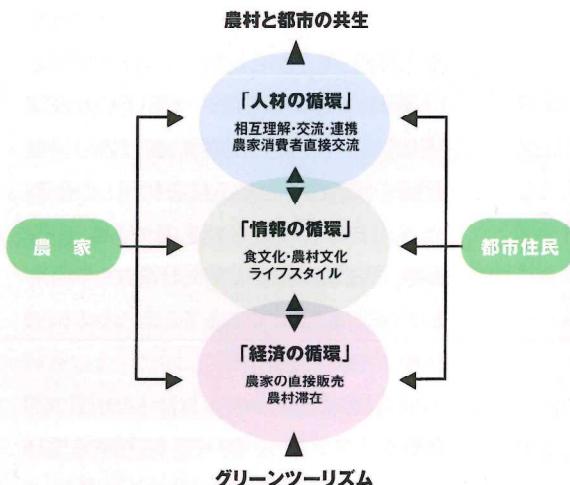
林 美香子

Mikako HAYASHI

慶應義塾大学大学院SDM研究科
特任教授／農都共生研究会会長

北海道大学農学部卒業。札幌テレビ放送株式会社アナウンサーを経て、キャスターとして独立。北海道大学大学院にて、博士(工学)を取得。慶應義塾大学大学院SDM研究科特任教授。北海道大学大学院農学研究院客員教授。北洋銀行社外取締役。札幌在住。

■研究テーマ／持続可能な農業、農村と都市の共生による地域再生、食と農による地域づくりなど
■著書／『農都共生のヒント』『農村へ出かけよう』『農業・農村で幸せになろうよ—農都共生に向けて—』ほか



撮影：KEIO EDGE LAB "CREATIVE LOUNGE"

<p>修士課程2年 田久保 英伸</p> <p>修士論文研究 安定的な農場経営を 目的とした CSAのコンセプト設計</p>	<p>修士課程2年 寄玉 昌宏</p> <p>修士論文研究 地域の食文化保護活動を デザインするための フレームワークの提案</p>	<p>修士課程2年 中村 紘士</p> <p>修士論文研究 再生可能エネルギー導入影響を 考慮したイギリス国内CEV ポートフォリオ最適化モデル</p>
--	--	--

熱い思いを知ることができて、非常に感銘を受けました。

林 それでは皆さんの研究テーマについて紹介してください。

寄玉 私の研究内容は、今日日本食が海外から注目されていますが、一方で地域に根ざした食に関する文化や産業が失われていると感じることから、それにどう関わり、盛り上げていくのかの方法論を研究しました。

田久保 CSA (Community Supported Agriculture)という地域が支える農業において、安定的な経営をすることが難しいといわれる理由のリサーチをおこない、経営が安定するためのコンセプトの設計をおこないました。冬に北海道の農家へも聞き取り調査をおこないました。

中村 二酸化炭素の排出を抑えた様々な自動車が開発される中、将来的にどの技術の自動車が普及するかを研究テーマにしました。ディーゼル車の普及するイギリスの事例をベースに価格と二酸化炭素の排出量を比べるなどの手法で研究しました。

林 今後の進路と、慶應SDMを目指す方へ一言お願いします。

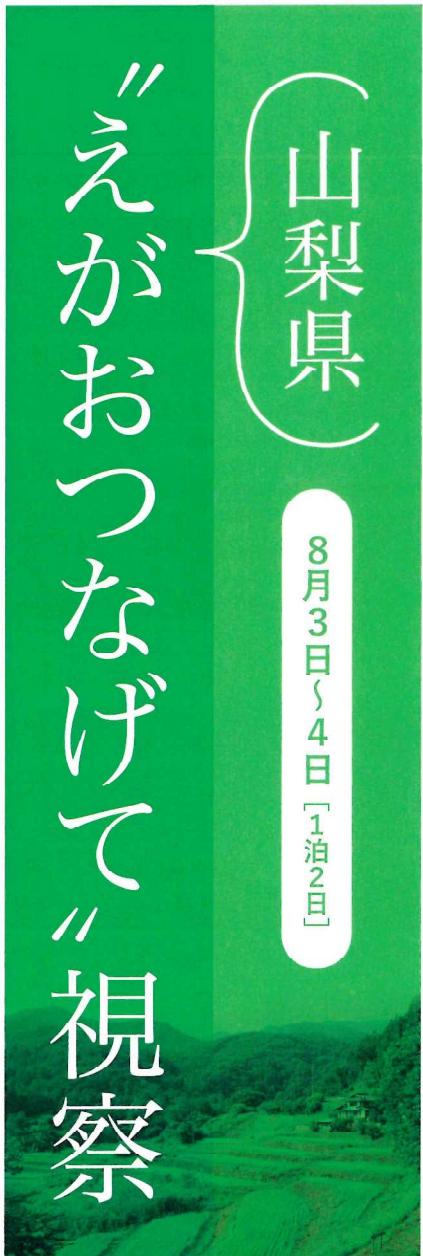
中村 私は自動車メーカーで働くことが決まっています。環境技術の普及の仕事をしたいと考えています。二酸化炭素削減には多くの問

題がありますが、社会に貢献できるようにがんばっていきます。慶應SDMは努力も必要ですが、様々なチャンスがあります。ぜひ入学してみてください。

田久保 修了後は地域活性分野のコンサルタント会社で働く予定です。進路選択ではアグリゼミOBでコンサルタントとして活躍していた村瀬さんの仕事を手伝った影響が大きいと思います。大手のコンサルティング会社には出来ないような実行支援型のコンサルティングに携わりたいと思っています。社会人も多い慶應SDMは他に代えがたい経験になります。ぜひチャレンジしてみてください。

寄玉 修了後の進路は起業を考えています。農業とは関係の無い分野ですが、介護服やその売り方の分野でまだまだイノベーションが起こせる余地があると思っています。食に関する分野では慶應SDMの研究員として大学に残って研究を続けています。やりたいことがある人はぜひ慶應SDMで食らいついで欲しいです。必ず何かが見つかると思います。

林 皆さん2年間大変お疲れ様でした。学んだことを活かして、これからもがんばってくださいね。



慶應SMD農都共生ラボ・アグリゼミでは毎年夏に地域活性の先進地視察をおこなっている。今年は林特任教授、保井俊之特別招聘教授、学生など8名が参加して、山梨県北杜市のNPO法人「えがおつなげ」を訪問した。このえがおつなげでは農業事業だけではなく、様々な活動をおこない、農業のあり方、地域のあり方を考えている団体である。今回はこの設立代表を務める曾根原氏を講師兼コーディネーターとして1泊2日の視察をおこなった。

曾根原氏には、農都共生研究会フォーラムで、講演を頂くなど、以前から交流が続いている。

NPO法人「えがおつなげ」は、北杜市に本部を置き、地域共生型の市民ネットワーク社会を作るために、まちづくりや、人づくりの観点から研究提案し、社会の機能として実際に働くように仕組みを作り、運営することを目的に、2001年に設立された。主な事業としては地域活性化のための開発や調査・コンサルタントなどのほか、農業を通じた教育・人材育成事業。えがおファームや企業ファームの運営の農業事業である。今回アグリゼミでは、ヒアリングするほか、えがおファームの視察と収穫体験なども実施した。最終日にはワークショップと発表もおこなった。

8月3日（1日目）

猛暑の中、JR新宿駅に集合した後、韮崎駅へ移動。そこからは車で20分ほど移動し、北杜市にあるえがおつなげの本部「開拓館」へ到着。この開拓館は200年以上前に建てられた古民家を利用した建物で、入り口は昔ながらの土間である。開設当初、この家は廃墟同然の状態で、事務所として使えるようにするまでにかなりの苦労があったとのことだ。

早速、曾根原氏からえがおつなげの活動紹介をスライドを使いながら説明を受ける。もちろん、この建物にクーラーは無い。この日気温30°C以上の真夏日だったので、到着当初は皆が額に汗を滲ませていた。しかし次第に暑さは気にならなくなる。庇が日を遮り、開け放ったドアからは心地よい風が流れ込み、先人の知恵を感じる。曾根原氏のレクチャーでは農村ボランティアとともに限界集落の耕作放棄地を開墾した内容、企業との連携による農林業の振興方法、企業のCSRや人材育成としての農業の可能性など、先進的な事例が紹介された。

その後フィールドワークとして、開墾により見事に甦ったえがおファームと企業ファームとして使用している農園を視察した。どれも今は立派な農地になっているが、

曾根原 久司 氏

NPO法人「えがおつなげ」代表



■主な著書
『農業起業者になる』『日本の田舎は宝の山』
(日本経済新聞出版社)

NPO法人「えがおつなげ」
<http://www.npo-egao.net>

1961年長野県生まれ。NPO法人えがおつなげで代表理事。内閣府地域活性化伝道師。山梨県立農業大学校講師。やまなしこミュニティビジネス推進協議会会長。大学卒業後、アルバイトをしながら音楽活動に熱中する。その後、企画会社、コンサルティング会社などに勤務、4年後に独立。銀行などの経営指導を通して日本の未来に危機感を抱き、その再生モデルを創造すべく、東京から山梨県白州町へと移住。2001年、NPO法人えがおつなげ設立。代表として「村・人・時代づくり」をコンセプトに農業を中心とした都市農村交流事業を展開している。



昔の面影そのままの
「開拓館」

ここまで開拓する苦労は人並みならないことを感じる。これぞえがおつなげの熱意の賜物であることに間違いない。

収穫体験ではズッキーニ、ジャガイモ、トマトを収穫。採れたての野菜は見るからに美味しそう。無農薬のトマトはその場で食べる人もいて、皆袋いっぱいの野菜を収穫した。

この日の宿は農家民宿「五郎舎」。標高1,100mに位置し日が落ちると昼間の暑さが嘘のように涼しくなる。夕食では宿自慢の自家菜園の野菜を使った郷土料理が振舞われる。美味しさと量の多さに驚きながらも、学生から曾根原氏へ様々な質問が出てくる。この日、曾根原氏と学生の語らいは夜遅くまで続いた。

8月4日（2日目）

この日も晴天、暑くなりそうな一日。しかし標高の高い五郎舎周辺の朝の空気はひんやりしている。素晴らしい美味しい朝食をいただき、宿を出発した一行は、みずがき自然公園を視察。みずがき自然公園は第52回全国植樹祭の跡地を利用した公園で、ロッククライミングやハイキング、キャンプなどのスポットとして人気が高い。またパワースポットとしても人気があるとのことだ。



その後、開拓館へ移動して、視察の締めとなるワークショップを2チームに分かれて実施した。テーマは曾根原氏の提案により、一つ目が「農業特区でのアグリビジネスを考える」、二つ目が「SDMの価値をどう広げるか」というテーマ。各チームがプレゼンに向けてアイディアを出し合った。限られた時間の中で作り上げたプランにもかかわらず、斬新なアイディアもあり、審査する曾根原氏が驚く場面も。

密度の濃い視察になったが、学生からは、「えがおつなげの取り組みや、その背景にある戦略がいかに緻密に計算され、予

測されていたものかということが印象的だった」「教室にこもって議論するだけでは出てこない発想が得られた」「出口(販売)まで考えた商品開発で地域創生のモデルケースとして大変参考になった」などの感想があった。また、「曾根原氏の仕組みづくりの上手さ、周りを巻き込む力の強さを感じた」など、農業や地域の可能性をもって熱意で語ってくれる曾根原氏に大変良い刺激をいただいた。

この場を借りて曾根原氏ほか関係者の皆様にお礼と感謝を伝えたい。



レクチャーにいろいろなヒントを得る



企業ファームなどの農地を視察



収穫体験中



みずがき自然公園



真剣な眼差しのワークショップでは、今年もたくさんのアイデアが生まれた



農家民宿「五郎舎」にて



イタリア視察レポート

林 美香子

2015年10月2日～9日、イタリアで開催されたミラノ万博と、イタリアの食や農村の生産現場を、食文化と地域づくりの先進事例として視察してきた。

史上初の食をテーマにしたミラノ万博は、2220万人の入場者を数え、経済や雇用創出にも大きな効果があった。食に关心が高く、各地に郷土料理が残るイタリアだからこそ、国民的関心を集め、人成功に繋がったのだと思う。またミラノ市は、万博を契機に、「都市食糧政策協定」を提唱し、世界の113都市が参加を表明している。

日本館は、ITや映像を駆使し、説明者付きで和食文化を紹介したが、228万人もの入場者があり、展示デザイン部門で金賞を受賞するなど高い評価を得た。世界各地に広がる和食ブームの影響もあるのだろう。日本館で実施された各自治体による料理試食や日本酒試飲のイベントは、入場者の関心を集め、長蛇の列ができていた。

地域づくりの成功例として世界的にも注目されているイタリアの農村地帯は、とても美しく、また活気が感じられた。伝統的な製法で丁寧に作られるチーズや生ハム、ブドウ果汁を長期間熟成させて作るバルサミコ酢などの工房には、多くの観光客や地元客が訪れている。地元農産物のおいしさをいかした郷土料理や、ブドウ畠・オリーブ畠の美しい風景が続くアグリツーリズモ（農村観光）には、多くの人を引き寄せる魅力がある。古い建物を修復してレストランや民宿を経営する農家が増加しているが、地域の乱開発を守るために作られたガラッソ法という景観法の効果もあり、質の高さを保っている。空き家が増え、閑散とした商店街が続く日本の地方とは大きな違いがある。

都会人の楽しみとして、豊かな食のある農村を訪れることが生活の中に根づき、それらの行動が、農村に経済効果をもたらし、地域づくりにつながっていると感じた。時間かけて高齢社会になったヨーロッパならではの、暮らしを楽しむ時間消費型のライフスタイルの奥の深さもあるのだと思う。また、多くの客で賑わう各地のマルシェや、オーガニックなど上質な食品を販売するスーパー・マーケットの繁盛ぶりにも驚いた。地元の農産物を買支えるイタリアの消費者の意識の高さも印象に残った。

イタリアの農村地帯で盛んに行われている農産物の高付加価値化や、アグリツーリズモなどの農都共活動には、大いに学ぶべき点があると感じた。



にぎわいを見せる「ミラノ万博」



「日本館」外観



「日本館」内部展示



チーズ工房



チーズ貯蔵庫



生ハム熟成庫



バルサミコ酢熟成庫



バルサミコ酢工房の売店

修士課程1年

竹田 和弘



年間を通じて、実地視察はもちろん、アグリゼミに参加している学生が農業に関わる多様なテーマを扱っているため、農業に関する広い視野を得ることができます。「農業」を捉える上でとても勉強になりました。

修士課程1年

宮村 貞量



アグリゼミの活動は、自身の研究テーマである地域活性化や人の生き方に対して、新たな視点をもたらした。特に夏合宿での「えがおつなげて」の視察では、人と農業の在り方の新しい可能性を垣間見ることができた。

修士課程1年

坂倉山季子



アグリゼミでは、農業を切り口に、地域活性化から衛星ビジネスまで多方面で活躍する方が参加されていて非常に刺激的です。北杜市視察では都市と農村のつなぎ方をシステムとして捉える貴重な機会を頂き勉強になりました。

修士課程1年

青山 勝彦



慶應SDM「アグリゼミ」で学ぶこと、それは「農業」を学ぶ場ではなく、「農」との関わり方を学ぶことであったと感じている。さらに1年、アグリゼミで学び、地域社会の活性化のための手法をさらに身につけたい。

農業・農村・地域活性化セミナー IN 日吉の報告

農都共生による地域づくりの大切さを広めることを目的に、慶應SDM研究所農都共生ラボなどの主催により開催している一般市民向けの公開セミナー。会場は、いずれも慶應義塾大学日吉キャンパス協生館3階CDF教室。

第3回 テーマ

2015年3月22日 「持続可能な地域づくりとは～人を巻き込む力・続ける力」

2014年、慶應SDM小布施ソーシャルデザインセンターが開設され、農都共生ラボで小布施視察を実施した経緯もあり、小布施町をテーマに開催した。

市村良三小布施町長の基調講演に続き、小布施ソーシャルデザインセンターの大宮透研究員、林特任教授による地域づくりの報告が行われた。市村町長と林特任教授による対談では、住民と協働による地域づくりの大切さ、継続させるための方法などが話し合われた。研究者、行政、地域づくり実践者など多くの参加があり、地域活性や6次産業化に関する熱心な質問が寄せられた。



第4回 テーマ

2015年8月28日 「新しい農業システムのひとつ CSAを考える」

CSAとは、地域住民(Community)が収穫の前に会費を出し合って農家と生産を支える(Supported)農業(Agriculture)のこと。

慶應SDMで博士号を取得し、CSA研究を続ける村瀬博昭さん(新潟薬科大学准教授)が基調講演。実践者の片柳義春さん(農業生産法人ないろ畑代表)は、「地域コミュニケーションこそ最大の産物」であると報告した。長野・宮城・三重県などからも、研究者、行政、農業関係者の参加があった。また、林特任教授をはじめた鼎談では、CSAを広めていくための方について、熱のこもった議論が繰り広げられた。



修了生

松尾 康弘



私が起業した2つの会社、アーバンファームファクトリーは都会で農にふれる機会を提供する会社で、気仙沼波止場は主に水産加工品を販売する会社です。今後はこれらを連携して農水産加工品を製造販売する予定です。

修了生

村瀬 博昭



大学の教員として農業振興や地域活性化に関する教育研究に従事しています。アグリゼミでは農村振興、農場経営、栽培技術など幅広いテーマを研究対象としているため、自分の研究分野以外の専門知識も身につきました。

修了生

本山 憲誠



アグリゼミの皆さんと一緒に日吉キャンパスに畑を作り自然栽培を始めたのが5年前。現在、埼玉県飯能市に2haの農地をお借りして農業ビジネスを展開しています。研究テーマをそのまま事業化しました。皆さんもどんどんチャレンジしてください。

修了生

櫻井 崇仁



学生起業で農家支援会社RIS(株)を立ち上げ、3年が経ちました。無事に、黒字化しビジネスの幅をさらに広げているところです。デザインからWEB制作、企画出口戦略まで担っています。アグリゼミからの起業を目指しましょう!

2015年度 農都共生ラボ活動成果

【論文】

■坂倉杏介、前野隆司、加藤せい子、林亮太郎、

三田愛・保井俊之

インプット・アウトプット・アウトカム評価—都市における共助・協業のための縁づくり・場づくり支援NPO活動の業績評価手法の提案及び有効性検証—、関東都市学会年報 第17号 2016年

■Toshiyuki Yasui, Madoka Maeno,

Naoko Hirota, Takashi Maeno

Systematic Expansion of Solution Space for Social Innovation: Structured Multiplication Approach to Solve Social Issues, The 9th Asia-Pacific Conference on Systems Engineering (APCOSEC2015), October 2015, Seoul, Korea

■Masahiro Yoritama, Mikako Hayashi,

Tetsuya Toma

Design of a Platform-System for Safeguarding Japanese Food Culture, The 9th Asia-Pacific Conference on Systems Engineering (APCOSEC2015), October 2015, Seoul, Korea

■林 美香子

【寄稿】

◎ホクレン発行「ほっかいどうナチュラルチーズの本」

2015年10月／「食と景観」コラム

【メディア掲載】

◎産経新聞2015年7月25日／「農村と都市の共生」

【講演会・フォーラムなど】

◎「札幌経済界フォーラム」2015年3月17日 札幌市
パネルディスカッションコーディネーター

◎「北洋銀行ビジネスフォーラム」2015年8月6日 札幌市
「地方創生の時代」講演

◎「地域活性化フォーラム」2015年10月30日 札幌市
「食と農による地域づくり」講演

◎「ITフォーラム」2016年1月19日 札幌市
「農業による地域づくり～IT活用の時代」講演

◎「地域づくりフォーラム」2016年2月5日 兵庫県三木市
「食と農による地域づくり」講演



地域の資本を活かして、日本をもっと元気に、北海道をもっと明るくすることを目的としています。全国各地の地域づくりの成功例を調査し、農村と都市の共に繁栄するあり方を研究しています。さらに農村と都市の共生と交流の促進を提言し、各地の地域振興の具体的な組織と連携し、各種事業を実践します。

農都共生研究会 Agricultural laboratory

■活動内容

研究会は次の活動を行う。

- ① 多様な活動主体の取組活発化に向けた活動
- ② 地域住民への普及・啓発に向けた活動
- ③ 農村と都市の共生と交流推進方策の検討
- ④ 農都共生に関わるビジネスプランの検討
- ⑤ その他研究会の目的を達成するために必要な活動

2015年度 活動報告

■3月22日

第3回 農業・農村・地域活性化セミナー

■5月25日

農都共生研究会ミニセミナー

当研究会幹事の辻村さんが代表をつとめる「北海道farm's」にて、農都共生の活動によって農村に与える影響を地産地消や日本ワインの現状などを織り交ぜながら説明がおこなわれました。トマトジュースの飲み比べや、あんこの食べ比べをおこない、比べると分かる味の違いに様々な意見が出ていました。



■8月16日

由仁町「みたむら農園」ちょこっと援農

由仁町の「みたむら農園」へ「種まき」作業のお手伝い。50メートルほどの畝に、大根、レタス、水菜、赤かぶなどの種を植えていました。ランチは生地もトマトソースも手作りのピザ。作業の後のごらそに一同、大満足でした。



■8月3~4日

慶應義塾大学大学院SDM研究科 アグリゼミ
山梨県「えがおつなげて」視察

■8月28日

第4回 農業・農村・地域活性化セミナー

■10月29日

「農都共生研究会 特別フォーラム」

■2016年3月 報告書発行

Pick up

農都共生研究会 特別フォーラム

~注目される北海道ワイン 未来へのヒント~

今年度の特別フォーラムは、「注目される北海道ワイン 未来へのヒント」として、アルキタイペントスペースEditで開催しました。

フォーラム前半は林美香子代表が「ミラノ万博レポート」と題して、現地の様子をスライドを使って報告。現地での日本食や北海道への関心の高さ、日本の展示館での様子を紹介しました。後半はNPO法人ワインクラスター北海道代表の阿部真久氏を招いて、北海道ワインの歴史や位置づけ、产地としての北海道の魅力や可能性について講演いただきました。当会に合わせて農都共生とワインについても触れていたいた講演はとてもわかりやすいと大変好評でした。



フォーラム終盤で今回のメインイベントである、北海道ワイン(白3種類)の飲み比べをおこない、ワインの楽しみ方(味の変化や色味の違い)を阿部さん直々にレクチャーいただきました。今回試飲で選んだワインは決して高いものではなく、手頃な値段で飲めるものでありながら、それぞれに個性のある白ワインを選定していました。

参加された方々の感想は「北海道ワインの見方が変わった」、「ワインは値段ではないと思った」、「自分にあったワインを見つけて楽しめたい」、「北海道ワインの可能性がわかりやすかった」など、多くの方から大変好評をいただきました。次回は赤ワイン、もしくは日本酒、チーズも良いね、など様々なご意見もいただきました。

阿部氏の講演で北海道ワインへの見方が変わった様に、北海道には素晴らしい素材や商品がありながら、意外に知られていないことが多いのが現状です。きちんと知ることが北海



道産の購買につなげる一歩だと感じるフォーラムとなりました。

活動内容や掲載記事など、詳しくはホームページをご覧ください。 <http://www.noutokyousei.jp/>

農都共生研究会

検索